行動経済学的要因が日本人の結婚行動に与える影響*

鈴木　亘[a]

要約

本稿は，筆者らの研究班が企画し，内閣府経済社会研究所が 2024 年 3 月に実施したアンケート調査（「少子化・女性活躍の経済学研究」に向けたアンケート調査）を用いて，行動経済学的要因が日本人の結婚行動に与える影響について分析を行った．その結果，①男女とも，危険回避的であるほど，結婚のタイミングが遅くなる，②男性で，双曲割引を持つ場合には，結婚のタイミングが早くなることがわかった．一方，③時間割引率が結婚のタイミング及ぼす影響は確認できなかった．このうち，①の結果については，主な先行研究とは異なる結果であり，注目される．しかし，危険回避度が高い人々は，交際相手がいる（いた）割合が低く，出会いや婚活の活動状況も低調である．出会い・交際の段階の消極さが，結婚の遅れに影響している可能性が高い．行動経済学的要因を考慮してリスクグループを特定し，適切な情報提供やナッジを行えば，効率的な結婚支援になる可能性がある．

JEL 分類番号： J12，D03，J18

キーワード：結婚行動，危険回避度，時間割引率，双曲割引

---

* 貴重な研究機会を与えてくれた内閣府経済社会総合研究所に感謝する．また，少子化・女性活躍の経済学研究研究会班のメンバーには，「「少子化・女性活躍の経済学研究」に向けたアンケート調査」の調査票を共同で作り上げる過程等で，多くの知的貢献をいただいた．特に，八代尚宏・昭和女子大学特命教授，児玉直美・明治学院大学教授，滝澤美帆・学習院大学教授からは有益なコメントをいただいた．感謝を申し上げたい．なお，本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない．

[a] 学習院大学経済学部教授　wataru.suzuki@gakushuin.ac.jp

1. イントロダクション

急速に進行する我が国の少子化は，日本経済，日本社会の持続可能性を揺るがす大きな社会問題である．その主な原因は，結婚したカップルの出生数が低下したというよりは，そもそも人々が結婚しなくなったという未婚化にあることが知られている．未婚化の原因としては，女性の高学歴化や社会進出に伴う機会費用の高まり，雇用の非正規化や労働所得の低下，職場や地域の結婚仲介機能の低下など，様々な仮説が提示され，多くの実証分析が行われている[1]．しかしながら，これらは基本的に，人々の合理的行動を前提とする伝統的な経済学によるアプローチである．一方，近年の行動経済学の発展と伴に明らかにされてきたように，人々の行動は必ずしも合理的とは言えず，様々な認知バイアスの存在によって，系統的に非合理な行動をとる場合がある．結婚行動についても，行動経済学的要因が影響している可能性があるが，その場合，経済的インセンティブだけではなく，ナッジなどの新しい政策手段が，結婚支援策として有効となる可能性がある．その意味で，結婚行動の行動経済学的な解明は今後，政策研究のテーマとして，重要性が増すものと思われる．

2. 先行研究

しかし，行動経済学の観点から結婚行動を分析した研究はごく限られているのが現状である（Schmidt(2008)，Spivey(2010)，関田（2012），Sekita（2012），佐藤（2016），西村（2016），西村（2023））．まず，危険回避度が結婚のタイミングに与える影響であるが，理論的には正負両方の効果がある．危険回避的な人ほど，結婚のリスクシェアリング機能を重視し，結婚のタイミングを早める可能性がある一方，結婚後の不仲や離婚のリスクを嫌い，サーチ期間を長くとって慎重に結婚相手を選ぶことも考え得る．そこで実証研究が重要となるが，海外の先行研究である Schmidt(2008)と Spivey(2010)は，リスク回避的であるほど，結婚のタイミングが早くなる結果を報告している．一方，我が国の研究では，Sekita（2012）の女性サンプル及び佐藤（2016）が同様の結果を報告しているが，Sekita(2012)の男性サンプル及び関田（2012）は有意な結果を得ていない．また，西村（2023）は婚活行動の分析であるが，危険回避的であるほど，活動が消極的であることを報告している．

一方，理論的には時間割引率が高いほど，結婚が早まるはずである．しかし，時間割引率を補足的に分析した関田（2012）及び佐藤（2016）では，有意な結果が得られていない．双曲割引については，西村（2016）が，恋人探しを先送りしている人々に，双曲割引を持つ割合が高いことを報告している．他方，婚活行動に対する双曲割引の影響をみた西村（2023）

[1] 未婚化の原因に関する我が国の研究サーベイは，鈴木・小島（2024）を参照されたい．鈴木・小島（2024）はその上で，様々な諸仮説を包括した推定式を用いて，大規模データによってそれらを定量的に評価する研究を行っている．

では，有意な結果は得られていない．本稿はこれらの研究を踏まえた上で，危険回避度と時間割引率，双曲割引を同時にコントロールし，結婚のタイミングに与える影響を分析する．

3．データ

本稿で用いるデータは，内閣府経済社会研究所が 2024 年 3 月に実施したアンケート調査（「少子化・女性活躍の経済学研究」に向けたアンケート調査）である．筆者を含む同研究所の少子化・女性活躍の経済学研究研究会のメンバーが調査票を独自に企画し，調査会社の大規模モニターサンプル（独身者男女と既婚者男女）に対して，インターネット上でアンケート調査を実施した．対象年齢は 25 歳から 49 歳であり，対象地域は全国である．具体的には，2023 年 1 月 1 日現在の住民基本台帳人口を用いて，都道府県別×男女別×年齢 5 歳階級別の目標回収数を母数割合に等しくなるように割り付け，その目標数を満たすように回収期間を設定した．最終的な回答数は独身者 1 万，既婚者 1 万である．

このアンケート調査では，大阪大学社会経済研究所の「くらしの好みと満足度についてのアンケート」の調査票に倣って，危険回避度と時間割引率に関する質問を設定している．まず，普段，降水確率が何%以上の時に傘を持って出かけるかという問に対し，10%刻みの降水確率を回答してもらい（雨傘指数），100%から雨傘指数を差し引き，危険回避度と定義した．一方，時間割引率は，2 日後の 1 万円（A）と 9 日後の X 円（B）のどちらを受け取るかという問に対し，X に異なる金額の入っている 8 個の選択肢全てに回答してもらい，A の回答から B の回答に切り替わった選択肢の金利を計算して時間割引率とする．もう一つ，90 日後の 1 万円と 97 日後の X 円に対する同様の問もあり，こちらの時間割引率よりも，2 日後と 9 日後の時間割引率の方が大きい場合を，双曲割引（ダミー変数）と定義した．結婚までの期間は，結婚年齢から法定結婚年齢（男 18 歳，女 16 歳）を差し引いた値である．

4．分析

本稿の分析手法は，結婚を Failure とし，結婚までの期間を分析対象とした生存時間分析である．既婚者データは結婚年齢を回答してもらっており，独身者データは打ち切りデータとなる．先行研究は，パネルデータや回顧パネルデータを使っていたが，本稿のデータはクロスセクションなので，結婚までの期間は全て回顧データである．なお，独身者と既婚者の割合は，データの設計上，同数ずつサンプリングされているが，現実には異なる．そこで，下記の分析は全て，2020 年の国勢調査の都道府県別・男女別・年齢階級別未婚率・既婚率を用いて，サンプリング・ウェイトを修正した推定を行っている．

まず，カプラン・マイヤー法で生存関数をみたものが，図 1 から図 3 である．図 1 は危険回避度別に生存関数を作成しているが，男女ともに，大きな差異があることがわかる．危険

回避度が高いほど，結婚のタイミングが遅い．一方，図２は時間割引率別の生存関数であるが，男女ともにあまり差異がない．図３は，双曲割引か否かで生存関数を作成しているが，男性についてのみ差異が大きく，双曲割引の方が結婚のタイミングが早くなっている．

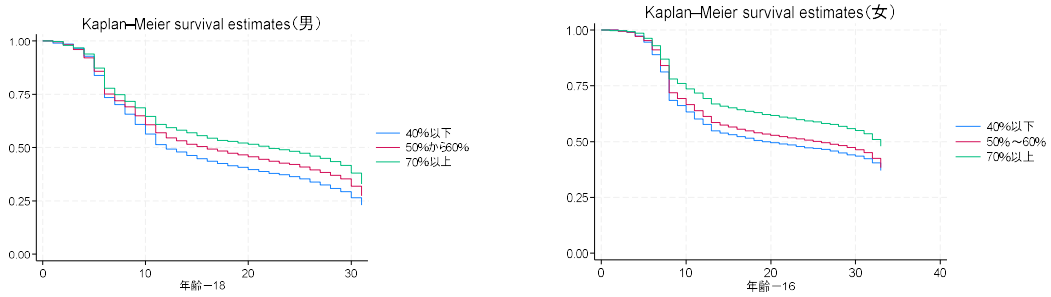

図１　カプラン・マイヤー法による結婚までの期間の生存関数１（危険回避度別）

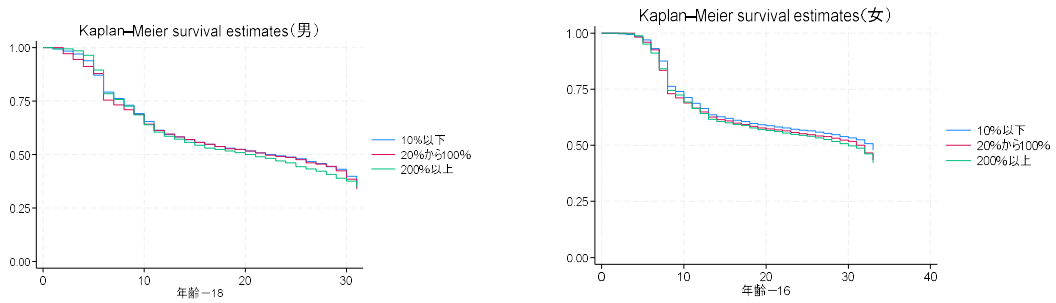

図２　カプラン・マイヤー法による結婚までの期間の生存関数２（時間割引率別）

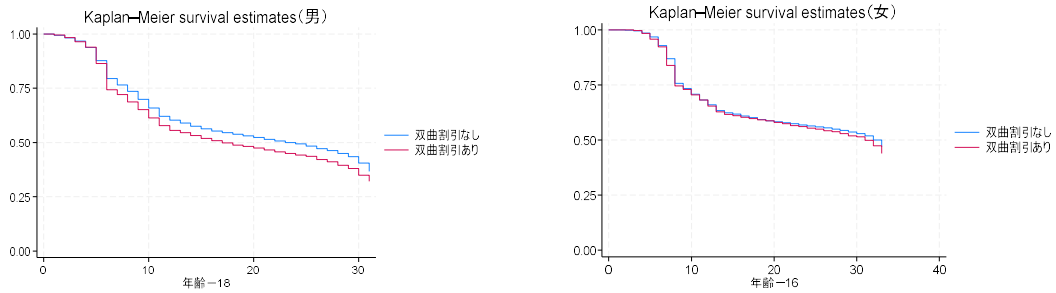

図３　カプラン・マイヤー法による結婚までの期間の生存関数３（双曲割引か否か）

次に，コックスの比例ハザードモデルを使って，行動経済学的変数が結婚のタイミングに与える影響を推定する．表１が男女別の結果であり，係数はハザード比で示している．まず，男性の推定結果を見ると，危険回避度が有意である．0.9971 というハザード比から，危険回避的であるほど，結婚のタイミングが遅くなることがわかる．一方，時間割引率は有意ではないが，双曲割引は有意であり，1.1441 というハザード比から，双曲割引が結婚のタイ

ミングを早めていることがわかる．その他の属性変数については，本稿のデータはクロスセクションなので，結婚までの期間内で変化しない変数を選んでいる．有意な変数は学歴（大卒以上），一人子，兄弟の人数，15 歳時点の両親仲が良い，身長高い・平均より高いであり，学歴（大卒以上）と一人子は結婚のタイミングを遅くし，それ以外は早める．女性についての行動経済学的変数は，危険回避度のみが有意である．0.9971 というハザード比から，男性と同様，危険回避的であるほど結婚のタイミングが遅くなることがわかる．属性変数については，学歴（大卒以上），兄弟の人数，女子高出身，15 歳時点で片親，15 歳時点の両親仲が良い，身長高い・平均より高いが有意である．学歴（大卒以上）と女子高出身，身長高い・平均より高い場合は，結婚のタイミングが遅くなり，それ以外は早くなる．

表１　コックスの比例ハザードモデルの推定結果

	男　性		女　性	
説明変数	係数（ハザード比）	標準誤差	係数（ハザード比）	標準誤差
危険回避度	0.9971 ***	0.0011	0.9971 ***	0.0011
時間割引率	1.0004	0.0003	1.0003	0.0003
双曲割引	1.1441 **	0.0692	1.0468	0.0688
学歴（大卒以上）	0.8378 ***	0.0429	0.7407 ***	0.0360
一人子	0.7519 ***	0.0773	0.8490	0.0849
兄弟人数	1.1445 ***	0.0348	1.1357 ***	0.0305
長男・長女	1.0079	0.0536	1.0260	0.0529
男子校・女子校（中学）	1.0736	0.1412	1.0542	0.1136
男子校・女子校（高校）	0.9980	0.0800	0.8193 ***	0.0591
男子校・女子校（大学）	0.9839	0.1098	0.9599	0.0687
15歳時点片親	0.9386	0.0906	1.1697 *	0.0972
15歳時点孤児	0.9051	0.2094	0.9214	0.2434
15歳時の両親仲が良い	1.2547 ***	0.0685	1.2328 ***	0.0652
身長高い・平均より高い	1.1203 **	0.0565	0.8922 **	0.0479
サンプルサイズ	7204		7720	
Log pseudolikelihood	-30467.581		-28943.126	

（注）Cox's Proportional Hazard Modelによる推定．都道府県ダミーとコホートダミーの推定結果は省略．2020年国勢調査の年齢別・都道府県別の未婚率・既婚率を使ってウェイトを修正しており、不均一分散に対して頑健な標準誤差を用いている．***が1%基準で有意，**が5%基準で有意，*が10%基準で有意である．

5．考察

本稿の結果で注目すべきは，危険回避度が結婚のタイミングに与える影響について，Sekita(2012)や関田（2012），佐藤（2016）など，主な先行研究とは異なる結果が得られたことである．なぜなのだろうか．実はこれらの研究が用いているデータは，今から 10 年以上前のものである．この間に起きた様々な環境変化が，結果の違いに影響した可能性がある．その一つは，男女の交際機会がますます減少していることである．実際，本稿のアンケート

調査において，危険回避度を 50%未満（低危険回避度）と 50%以上（高危険回避度）に分けて交際の状況を比較すると，現在交際中，３年以内に交際あり，３年以前に交際ありという全項目にわたって，高危険回避度の人の方が，異性と交際している割合が顕著に低い．また，このアンケート調査では様々な出会いや婚活行動についても尋ねているが，多くの項目で，高危険回避度の人は低危険回避度の人より，活動が低調であった[2]．つまり，危険回避的な人は結婚以前の問題として，交際や婚活に消極的で，それが結婚の遅れにつながっている可能性が高い．また，女性については，この 10 年ほどの間に，高学歴化や社会進出がますます進み，「結婚しないことのリスク」が低下したと思われる．つまり，女性の自立化が進み，独身を続けることの生活不安が小さくなった一方，結婚に伴うリスク（結婚後の不仲や離婚）が相対的に高まったことから，危険回避度の影響が後者に強く出た可能性がある．一方，双曲割引とは，将来のことは合理的に待てるのに，目前のことは待てないということである．目前に現れた交際相手でサーチ期間を終了しやすくなることから，推定結果は理論と整合的である．今後，行動経済学的要因も含めて，結婚しにくいリスクグループを特定できれば，適切な情報提供やナッジを使い，効率的な結婚支援につながることが期待できよう．

引用文献

佐藤一磨, 2016．危険回避的な人ほど早く結婚するのか，それとも遅く結婚するのか．経済分析 190, 25-46.

鈴木亘・小島宗一郎, 2024．独身者データと既婚者の振り返りデータを用いた結婚の決定要因に関する経済分析．日本労働研究雑誌 768, 35- 52.

関田静香, 2012．リスク回避度と結婚のタイミング．日本経済学会秋季大会発表論文.

西村智, 2016．若者の恋愛離れに関する一考察：恋人探しにみる先送り行動．人口学研究 52, 25-27.

西村教子, 2023．なぜ未婚男性は「婚活」をしないのか―リスク回避か先送りか―．RISS Discussion Paper Series 108.

Schmidt, Lucie, 2008．Risk Preferences and the Timing of Marriage and Childbearing．Demography 45, 439-460.

Sekita, Shizuka, 2012．Risk Aversion and the Timing of Marriage: Evidence from Japan．Poster Session, Population Association of America.

Spivey, Christy, 2010．Desperation or desire? The role of risk aversion in marriage．Economic Inquiry 48(2), 499-519.

[2] この点は西村（2023）の結果とも整合的である．